

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 2 月 20 日現在

機関番号：30110

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21890237

研究課題名（和文）高齢者の地域社会における役割の見直しに基づく  
ヘルスプロモーションプログラムの効果研究課題名（英文）The Effect of a Health Promotion Program Reconsidering New Social  
Roles of Elderly People in the Community

研究代表者

佐藤 美由紀 (SATO MIYUKI)

北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号：80550318

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、高齢者の役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムを作成し、それを地域高齢者に実践してもらうことによる介入効果を検証するとともに、その介入プロセスを明らかにすることである。本研究は、住民同士の話し合いを基盤とした 4 つのステージで構成された参加型アクションリサーチアプローチを用いた。その後、ヘルスプロモーションプログラムの効果を評価した。ヘルスプロモーションプログラムは、地域高齢者の主体的活動を創出し、地域高齢者全体の健康増進に有効であると示唆された。本研究のプログラムは、介護予防一次予防や保健福祉向上のための政策づくりに寄与すると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the effect of the intervention based on a health promotion program and to describe the process of the intervention in detail. We adopted 'community-based participatory action research approach' consisting of four stages based on discussions among the residents. Further, we evaluated the participants' practice for health promotion program. As a result, voluntary activities of the elderly residents in the community were produced and there were suggested to be useful to health promotion of the elderly residents in the community as a whole. The present program was considered to contribute to primary prevention and the planning of policies for health and welfare.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	840,000	252,000	1,092,000
平成 22 年度	940,000	282,000	1,222,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,780,000	534,000	2,314,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：地域高齢者・社会的役割・社会参加・ヘルスプロモーション・アクション・リサーチ

## 1. 研究開始当初の背景

2006 年介護予防一般高齢者施策が地域包括支援センターの業務として位置付けられたが、行われている内容は従来からの転倒予防、認知症予防などが中心であり、現場では効果的なプログラム内容や実践方法を暗中模

索している。

高齢者が社会において役割を遂行することは身体的、精神的健康を高める<sup>1-2)</sup>。しかし、高齢期の課題として、社会的地位の変化に伴う「役割の喪失」がある。役割の喪失は、高齢者の精神的健康や QOL を低下させる大きな

要因の1つであり、長寿社会を実現したわが国では、高齢期というライフサイクルにおける共通の健康課題と言える。過去には、高齢者は「役割なき役割」とも呼ばれ、役割がないのは当然視されていた。Rosow<sup>3)</sup>は、そのような高齢者の状況に対して、新しい地位や役割を創造することの必要性を訴えている。現在、高齢者が地域社会において行っている主な役割は、環境美化に関する活動<sup>4)</sup>であるが、やる気もあり、地域貢献意欲も高い団塊の世代が、退職期を迎えており<sup>5)</sup>、このような活力ある高齢者の意欲や能力を最大限に活かすためには、彼らが力を発揮できる地域社会における高齢者の役割の見直しが急務である。

地域社会における役割に関する先行研究は、横断的、観察型<sup>4),6)</sup>のものが多く、最近では絵本の読み聞かせや介護予防体操のボランティア活動の介入研究<sup>7-9)</sup>がみられ、健康度自己評価の改善<sup>7)</sup>、高次の生活機能の低下の抑制<sup>8)</sup>など、ボランティアの健康面への効果が明らかになってきている。しかし、高齢者に役割を付与する介入研究はまだ少なく、実践に適用できるプログラム開発までには至っていない。さらに、従来の研究での介入プログラムにおける役割は、研究者が準備したものであり、高齢者や地域社会のニーズに基づいたものではない。

芳賀ら<sup>9)</sup>は、北海道の農村I町において地域高齢者が数回に及ぶグループワークを通して地域における役割を見直し、ニーズの高かった役割（相互学習、環境美化、地域の交流、相互扶助）を役割づくり事業として設定し、高齢者がその役割を遂行できるように保健福祉職とともに支援するアクションリサーチを行い、本研究申請者も町保健師として介入に関わった。その結果、新たな役割遂行を計画した介入地区では、対照地区に比べて、生活機能、QOLが有意に向上した。しかし、このプログラムを一般化するための課題として以下の3つがある。(1) 効果を比較する対照地区の選定を便宜的に行ったため、介入地区と対照地区の特性の違いが大きい。(2) 役割は本来、周りからの期待に基づくものであるが、他世代の住民の意見が反映されていない。(3) A町での取り組みは高齢者のニーズに応じ、試行錯誤しながら進めてきたために、介入プロセスの詳細記録が示されていない。これらの課題をふまえた地域高齢者の役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムの効果を検証し、プログラムの一般化、マニュアル化に向けた研究が急務である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢者の役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムを作成し、それを地域高齢者に実践してもらうことによる介入効果を検証するとともに、その介入プロセスを明らかにすることにより、

高齢者が生きがいを持ち健康を保持増進できる介護予防一般高齢者施策の基礎資料とすることである。本研究において明らかにする点は次の3つである。

(1) 他世代を含む地域住民のグループワークを通じて、高齢者の役割の見直しを行い、地域高齢者が実践可能な役割の種類を明らかにする。

(2) 役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムが役割遂行や社会関係への影響、及び心身の健康やQOLに及ぼす効果を明らかにする。

(3) 高齢者の地域での役割の実践化に向けた介入プロセスを明らかにすることにより、プログラムのマニュアル化を目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

役割の見直しに基づくヘルスプロモーションプログラムの効果として、役割遂行や社会関係、心身の健康、QOLの向上を仮説とする介入地区と対照地区との比較による参加型アクションリサーチによる介入研究である。

### (2) 研究対象地区

北海道札幌市に近接する江別市A自治会である。A自治会は110世帯249名、高齢化率37.7%である。

### (3) 研究期間

平成21年9月～平成23年3月までである。

### (4) 調査及び介入方法

介入は「課題の明確化」「アクションプランの立案」「アクションプランの実施」「成果の評価」の4つのステージから成る。

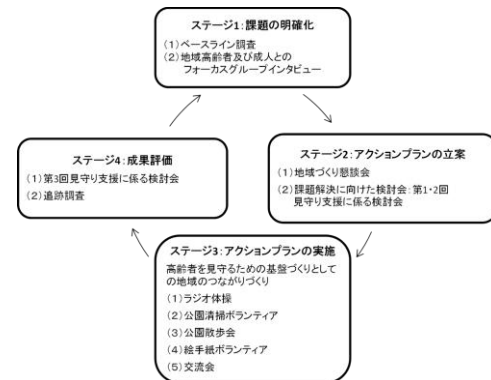


図1: 介入地区における本研究のプロセス

### ステージ1：課題の明確化

#### ① ベースライン調査

【調査対象】 介入地区及び対照地区に居住する60歳以上の全住民を対象（介入地区106名、対照地区168名）に実施した。

【調査時期】 平成22年2～3月までであった。

【データ収集方法】 郵送留置き法による自記式質問紙調査とした。回収は、会場、訪問、郵送により行った。介入地区84名、対照地区137名を分析対象（80.7%）とした。

【調査内容】 基本属性（性、年齢、世帯、職業、

教育歴, 居住年数, 暮らし向き), 地域活動 5 項目, ボランティア活動 7 項目, 近隣関係 (交流頻度, サポート授受), 親しい友人数, 健康度自己評価, 生活満足度, 生活機能 (老研式活動能力指標<sup>10)</sup>), 生きがい (生きがい尺度 K-I<sup>11)</sup>) であった。

**[分析方法]** 各項目に対して介入地区と対照地区の比較を実施した。離散変数は  $\chi^2$  検定, 連続変数は t 検定を実施した。

## ②グループインタビュー

**[目的]** 地域住民の高齢者に対する役割期待およびその役割を実践するために必要な支援を明らかにし, 高齢者の地域社会における役割を見直すための一助とすることである

**[方法]** 対象は A 自治会の 60 歳以上及び 30~60 歳未満各 7 名の 2 グループである。地域の集会所にて, 半構成的インタビューを平成 22 年 5 月に実施した。

## ステージ 2: アクションプランの立案

### ①地域づくり懇談会

**[目的]** グループワークにより, 地域住民の期待に基づいて, 高齢者の役割を見直し, 実践に向けた具体策を検討することである。

**[方法]** 地区の集会場において平成 22 年 6 月と 7 月に「シニアの地域活動と役割を考える地域づくり懇談会」を開催した。

### ②課題解決に向けた検討会 (第 1・2 回高齢者見守り支援に係る検討会)

地域づくり懇談会において期待されている役割の第 1 位となった「高齢者の見守り」の実践に向けて具体策についての検討会を地区集会所にて 9 月と 10 月の 2 回開催した。

## ステージ 3: アクションプランの実施

地域づくり懇談会にて提示した役割案や課題解決に向けた検討会において出された意見より, 住民が主体的に活動を開始した。

## ステージ 4: 成果評価

### ①第 3 回高齢者見守り支援に係る検討会

平成 23 年 2 月にこれまでの地域のつながりづくり活動状況の報告及び次年度の取り組みの方向性を検討した。

### ②追跡調査

**[調査対象]** 介入地区及び対照地区に居住する 60 歳以上の全住民を対象 (介入地区 108 名, 対照地区 174 名) に実施した。

**[調査時期]** 平成 23 年 2~3 月までであった。

**[データ収集方法]** 郵送留置き法による自記式質問紙調査とした。回収は, 会場, 訪問, 郵送により行った。介入地区 85 名, 対照地区 134 名を分析対象 (77.9%) とした。

**[調査内容]** ベースライン調査と同様である。

**[分析方法]** 介入地区と対照地区の介入前後の変化の比較は, 離散変数については介入前よりも「向上」と介入前と変化がなかったものと低下した「維持・低下」の 2 区分に再分類し,  $\chi^2$  検定を行った。連続変数については平均値の比較を一般線型モデル反復測定分

割法により実施した。解析には SPSS20.0J for Windows を用いた。

なお, 本研究は, 北海道医療大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

### ステージ 1: 課題の明確化

#### (1) ベースライン調査

##### ①介入地区と対照地区の比較

表 1 にベースライン調査時における対象特性の比較を示した。対象者の平均年齢などの属性はすべて有意な差は認められなかった。地域活動では, 各活動の参加割合に有意な差は認められなかった。ボランティア活動では, 美化活動の参加ありが介入地区 61.9%, 対照地区 44.5%, 地域の交流活動の参加割合が介入地区 21.7%, 対照地区 10.2% と介入地区の参加割合が有意に高かった。その他のボランティア活動の参加割合には有意な差は認められなかった。近隣との交流も両地区で有意な差は認められず, 挨拶を月 1 回以上行っているのは両地区とも約 8 割, 立ち話を月 1 回以上行っているのは両地区とも約 6 割であった。近隣サポート得点も有意な差は認められなかった。健康度自己評価も両地区で有意な差は認められなかった。老研式活動能力指標は介入地区 10.93±2.80, 対照地区 11.63±2.39 と対照地区が有意に高かった。生きがいは両地区に有意な差は認められなかった。これらにより, 介入地区と対照地区はほぼ同質と判断された。

表 1 介入前の対象者特性の地区別比較

		介入地区		対照地区		検定	
		n=84	n=137	n=137	n=137		
属性	年齢	73.6 ± 8.0	73.5 ± 7.7	(60-93)		n.s	
	(range)	(60-93)		(60-94)			
	性別	(男)	33 39.3%	59 43.1%			n.s
	(女)	51 60.7%	78 56.9%				
	世帯形態	(単身世帯)	13 15.7%	14 10.2%			n.s
		(夫婦世帯)	42 50.6%	70 51.1%			
		(その他)	28 33.7%	53 38.7%			
		(なし)	76 90.5%	116 84.7%			
	職業	(20年以上)	75 90.4%	122 89.1%			n.s
	居住年数	(13年以上)	30 36.6%	59 43.1%			n.s
暮らし向き	(普通・ゆとりあり)	78 92.9%	114 83.2%			n.s	
地域活動	自治会や地域行事	(参加あり)	40 47.6%	61 44.5%			n.s
	老人クラブ	(参加あり)	7 8.3%	13 9.5%			n.s
	健康・体力づくりの活動	(参加あり)	20 23.8%	32 23.4%			n.s
	学習活動	(参加あり)	10 11.9%	11 8.0%			n.s
	趣味活動	(参加あり)	32 38.1%	62 45.3%			n.s
	地域活動参加数	(5点満点)	1.30 ± 1.29	1.45 ± 1.25			n.s
	ボランティア活動	美化活動	(参加あり)	52 61.9%	62 45.3%		
地域の交流活動		(参加あり)	18 21.7%	14 10.2%			*
高齢者の見守りや手助け		(参加あり)	10 12.0%	13 8.0%			n.s
子どもの見守り・声かけ		(参加あり)	13 15.7%	12 8.8%			n.s
交通安全・防犯活動		(参加あり)	14 16.9%	14 10.2%			n.s
文化や歴史を伝える		(参加あり)	3 3.6%	5 3.6%			n.s
知識・特技を教える		(参加あり)	7 8.4%	11 8.0%			n.s
ボランティア活動参加数	(7点満点)	1.41 ± 1.55	.96 ± 1.27			n.s	
近隣交流	挨拶	(月1回以上)	73 88.0%	114 83.2%			n.s
	立ち話	(月1回以上)	51 60.7%	91 66.4%			n.s
近隣サポート得点	(24点満点)	5.08 ± 4.00	4.33 ± 4.32			n.s	
		8.04 ± 13.64	6.66 ± 9.57			n.s	
健康度自己評価	(良好)	60 71.4%	108 78.8%			n.s	
老研式活動能力得点	(13点満点)	10.93 ± 2.80	11.63 ± 2.39			*	
生活満足度	(満足)	78 92.9%	126 92.0%			n.s	
生きがい	(32点満点)	24.18 ± 7.04	25.87 ± 6.20			n.s	

離散変数は  $\chi^2$  検定, 連続変数は \* $p<0.05$ , \*\* $p<0.001$ , n.s=有意差なし

## ②介入地区の特徴と課題

介入地区の特徴として、自治会や地域行事、活動への参加割合が高いことから、自治会が美化活動や地域の交流事業のボランティア機能していると推測された。また、教育年数13年以上が4割と高学歴であることや趣味活動に参加している者が多いことから知識や特技を持つ人材が潜在している可能性が示唆された。しかし、近隣と挨拶を交わすのは月1回未満が約1割、立ち話をするのが月1回未満は約4割と挨拶程度の希薄な近隣関係と考えられた。

### (2) フォーカスグループインタビュー

地域の課題として、少子高齢化の進行による、一人暮らし、認知症、虚弱高齢者が増加しているが、気遣っていても手助けまでには至らない希薄な近隣関係である一方、地域で支えあう必要性について多く語られた。高齢者に期待する役割として、見守りや声かけなどにより高齢者を地域で支えること、子どもの育成、高齢者がこれまで培った知識や能力を他世代に受け継ぐことが挙げられた。

### ステージ2：アクションプランの立案

#### (1) 地域づくり懇談会

##### ①役割案の優先順位づけ

参加者は第1回15名、第2回22名であった。第1回目では「高齢者に期待していること」について、グループに分かれて話し合った。第2回目は第1回で明らかになった高齢者に期待されている役割に基づいて研究者が作成した10個の役割案を参加者に提示し（表2）、実践意欲（やってみたい、やってみたくない）と実現可能性（やれそう、やれそうにない）の4分割表に参加者が一人10個ずつの役割を仕分けした。その結果、「やってみたい×やれそう」に仕分けされた役割の上位は、1位が「高齢者の見守りボランティア」（19人）、2位が「高齢者のちょっとした困りごとを手助け」、「環境美化活動」（15人）、4位が「健康づくり応援団」（12人）、5位が「高齢者の買い物・受診のサポート」（11人）であった。

##### ②高齢者の見守りボランティア実践のための具体策

優先順位が第1位であった「高齢者の見守りボランティア」の実践に向けた具体策をグループで話し合った。高齢者の見守りの実践の具体策として、照明の確認などによる「日常生活での見守り」と担当者を決めて行う「組織的な見守り」があり、見守りは、見守るだけにとどまらず、外出支援や新

表2住民の意見により作成した役割案  
(優先順位順)

- ①高齢者の見守り
- ②高齢者の困りごとを手助け
- ③環境美化
- ④住民の健康づくりをサポート
- ⑤高齢者の買い物・受診のサポート
- ⑥定期的な交流会の開催
- ⑦子育て・介護者不在時のお留守番
- ⑧児童センターでのボランティア
- ⑨防災・防犯活動
- ⑩学習活動の企画開催

聞配達など「他の支援や社会資源との連携した支援体制づくり」「緊急・災害時の支援体制づくり」など[地域における高齢者支援体制づくり]が必要であり、これらが見守りが機能するためには、「地域住民のつながり」や「高齢者を尊重する」といった「支えあいの基盤」づくりの必要性が明らかになった。話し合い終了後に高齢者の見守りを実践するための検討会メンバーを募った。自治会長ら5名が参加意思を表明した。

### (2) 課題解決に向けた検討会（第1・2回高齢者の見守り支援に係る検討会）

地域づくり懇談会において優先順位が1位となった高齢者の見守りを実践するための検討会を9月と10月に2回開催した。メンバーは、懇談会で参加意思を表明した者、自治会役員や防災委員、地域包括支援センター職員、研究者である。9月に近くのスーパーの閉店により、多くの高齢者が買い物やATMによる年金の引出しが不自由となっていた。自治会では、検討会に併せて数年ぶりに防災会議を開催し、地域の見守りが必要な高齢者の把握に取り組んだ。第1回検討会は住民9名が出席し、防災委員が把握した情報に基づいて自治会長が作成したマップにより、1人暮らし高齢者等の状況についての報告、研究者による先進事例の紹介、話し合いによる見守りの実践に向けての課題の整理を行った。第2回検討会は住民9名が出席、自治会長と各防災委員から第1回目以後に把握した高齢者状況が報告された。その後の話し合いの結果、近隣関係が希薄な現状では見守りは機能しないことがメンバーに共通認識され、まず地域住民が顔見知りとなる必要性が明らかになった。見守りの基盤となる地域のつながりづくりに取り組むことが決定され、具体的な活動について話し合った。交流会、絵手紙を送るなどの意見が出された。後日、自治会長ら5名により具体的な企画が検討され、公園散歩会の実施が決定した。

### ステージ3：アクションプランの実行

第2回地域づくり懇談会后より、住民が主体的に地域活動等を開始した。

(1) ラジオ体操：第2回地域づくり懇談会后、自治会長の発案により夏休み期間のみ実施していたラジオ体操を11月まで継続した。ラジオ体操は懇談会において提示した役割である。8～11月までのべ266名が参加した。

(2) 公園清掃ボランティア：自治会長の発案により、9月に自治会に所在する公園清掃を行政より受託し、自治会住民からボランティアを募った。26名がボランティアとして登録した。活動はラジオ体操参加者による日々

のゴミ拾いと年数回の集団清掃である。集団清掃は2回56名が参加した。美化活動は地域づくり懇談会において提示した役割である。

(3) **公園散歩会**：地域のつながりづくり活動として10月に公園散歩会が企画され、回覧にて周知された。11名の参加申し込みがあったが、悪天候のため中止となった。

(4) **絵手紙ボランティア**：地域のつながりづくり活動の企画メンバーであった女性2名が、1人暮らし高齢者とのつながりづくりを目的に絵手紙を訪問にて手渡しするボランティア活動を開始した。12月に絵手紙講習会を開催し、その後ボランティアを募集した。住民10名が登録した。講習会で作成した絵手紙を試験的に数名に訪問して届けた。高齢者から「気にかけてくれて嬉しい」等の反応があり、活動に対する手ごたえを感じていた。

(5) **交流会**：2月に虚弱高齢者も参加可能なように地区に近接するデイサービスを会場にレクリエーション交流会を開催した。19名が参加、90代の虚弱高齢者の夫婦が参加した。

#### ステージ4：成果評価

##### (1) 第3回高齢者の見守り支援に係る検討会

自治会役員や各活動のリーダー10名、地域包括支援センター職員、研究者が出席した。自治会長から、1月の大雪時にこれまで把握した高齢者情報を活用し、各班の防災委員が迅速に安否確認を実施したことが報告された。安否確認により明らかになった課題を踏まえ、今後の方向性として、地域のつながりづくり活動の継続によりゆるやかなつながりづくりを行うこと、関わりを望まない人に対しては、本人の意向を尊重しながら日常でさりげなく気にかけることが合意された。

##### (2) 追跡調査

##### ①介入地区と対照地区の地域活動、ボランティア活動の変化

地域活動は各活動及び参加活動数において介入地区と対照地区とでは有意な差は認められなかった(表3,4)。ボランティア活動では、交流活動のボランティアと子どもの見守り・声かけは、介入地区が有意に向上していた(表3)。ボランティア活動参加数においても対照地区に比較して介入地区は有意に増えていた(表4)。

##### ②介入地区と対照地区の社会関係の変化

親しい友人数は両地区に有意な差は認められなかった(表4)。近隣との交流は、挨拶頻度が向上した者が介入地区37.0%、対照地区23.9%、立ち話の頻度が向上した者は介入地区35.6%、対照地区30.4%と有意な差は認められないものの介入地区において向上している傾向が示された( $P < 0.10$ )。近隣サポート得点の変化については両地区において有意な差は認められなかった。

##### ③介入地区と対照地区の健康指標の変化

健康度自己評価、生活満足度、老研式活動能力指標は、両地区に有意な差は認められなかった(表3,4)。生きがいは、両地区に有意な差は認められなかったが、介入地区は得点が増加し、対照地区は得点が減少していた。

表3 地域・ボランティア活動、社会関係、健康指標(離散変数)の介入後の比較

	介入地区(N=73)		対照地区(N=115)		P値	
	低下維持	向上	低下維持	向上		
地域活動	自治会	61	12	91	24	.452
		83.6%	16.4%	79.1%	20.9%	
	老人クラブ	71	2	109	6	.412
		97.3%	2.7%	94.8%	5.2%	
	健康づくり活動	59	14	86	29	.337
		80.8%	19.2%	74.8%	25.2%	
	交流活動	61	12	105	10	.107
		83.6%	16.4%	91.3%	8.7%	
	学習活動	71	2	110	5	.570
		97.3%	2.7%	95.7%	4.3%	
ボランティア活動	趣味活動	64	9	101	14	.975
		87.7%	12.3%	87.8%	12.2%	
	美化活動	64	9	102	13	.831
		87.7%	12.3%	88.7%	11.3%	
	交流活動のボランティア	60	13	106	9	.038
		82.2%	17.8%	92.2%	7.8%	
	高齢者の見守り	63	10	107	8	.126
	子どもの見守り	58	15	108	7	.003
		79.5%	20.5%	93.9%	6.1%	
	防犯	69	4	114	1	.056
	94.5%	5.5%	99.1%	.9%		
近隣との交流	伝承活動	71	2	115	0	.074
		97.3%	2.7%	100.0%	.0%	
	教える	71	2	110	4	.771
		97.3%	2.7%	96.5%	3.5%	
	近隣との挨拶	46	27	86	27	.055
		63.0%	37.0%	76.1%	23.9%	
	近隣との立ち話	47	26	80	35	.460
		64.4%	35.6%	69.6%	30.4%	
	健康度自己評価	58	15	98	19	.451
		79.5%	20.5%	83.8%	16.2%	
生活満足度	61	12	100	15	.518	
	83.6%	16.4%	87.0%	13.0%		

χ<sup>2</sup>検定

表4 地域・ボランティア活動、社会関係、健康指標(連続変数)の介入後の比較

	地区	介入前		介入後		P値
		mean	SD	mean	SD	
地域活動参加数	介入地区	1.38	1.33	1.41	1.35	.951
	対照地区	1.30	1.12	1.48	1.28	
ボランティア活動参加数	介入地区	1.45	1.60	1.62	1.75	.004
	対照地区	.97	1.29	.97	1.22	
親しい友人数	介入地区	8.43	14.35	7.03	13.27	.582
	対照地区	6.94	10.32	6.72	10.50	
近隣サポート得点	介入地区	5.15	4.08	5.53	4.51	.268
	対照地区	4.27	4.30	5.01	4.90	
老研式活動能力指標得点	介入地区	11.11	2.59	11.04	2.78	.185
	対照地区	11.60	2.33	11.52	2.56	
生きがい得点	介入地区	24.86	6.70	25.40	5.51	.441
	対照地区	25.98	6.18	25.58	5.75	

介入地区n=73, 対照地区n=115, mean±SD

一般線型モデル反復測定(分割法)

#### 各ステージにおける全住民への情報発信

地域全体への波及効果を高めるため、各ス

ページにおいて地域住民すべてを対象に情報を発信した。ステージ 1 では、研究概要を回覧し、春の一斉清掃活動にて説明した。ステージ 2 では、地域づくり懇談会での話し合い結果を回覧および地域の交流事業にて報告した。ステージ 3 では、10 月から地域のつながりづくりに関する情報を提供するために通信の発行を開始し、各戸配布した。平成 23 年 3 月まで 4 回発行した。

#### 研究成果のまとめ

高齢者が日常生活圏のコミュニティにおいて、地域における役割を見直し、活動することによる心身への効果を明らかにするために、参加型アクションリサーチを実施し、以下の知見が得られた。

(1) 少子高齢化が進行している A 自治会の高齢者に期待されている役割及び高齢者自身が担いたい役割は、高齢者の見守りや支援に関する事、子どもの育成や見守り、高齢者がこれまで培った知識や能力を他世代に受け継ぐことであった。

(2) 期待されている役割に基づき、高齢者が地域活動やボランティア活動を実施した効果として、地域高齢者全体に対して、ボランティア活動の増加、近隣との交流頻度の増加、生きがいの向上がみられ、地域高齢者全体の健康水準を改善する可能性が示唆された。

(3) 住民同士の話し合いを基盤とした「課題の明確化」「アクションプランの立案」「アクションプランの実施」「成果の評価」の 4 つのステージで構成された介入は、住民主体の地域活動を創出する可能性が示唆された。

これらにより、住民同士の話し合いに基づき、地域における高齢者の役割を見直し、実践する本研究のヘルスプロモーションプログラムは、地域高齢者全体の健康増進をはかる介護予防一次予防として有効であるとともに地域の保健福祉向上に寄与すると考えられた。

#### 引用文献

- 1) Glass TA, Leon CM, et al. : Population based study of social and productive activities as predictors of survival among elderly Americans. *British medical journal*, 319 : 478 - 483 (1999).
- 2) Menec VH : The Relation Between Everyday Activities and Successful Aging : A 6 - Year Longitudinal Study . *Journals of Gerontology, Social Science* , 58(2) : S74 - S82 (2003).
- 3) Rosow, I. (嵯峨座晴夫他訳) : 高齢者の社会学. 早稲田大学出版部, 東京 (1998)
- 4) 高橋和子, 安村誠司, 矢部順子ほか : 東北地方の在宅高齢者における地域・家庭での役割の実態と関連要因の検討. *厚生*の指標, 54(1) : 9 - 16 (2007).

5) 内閣府 : 高齢社会白書(平成 18 年版). 18 - 61, ぎょうせい, 東京 (2006).

6) Herzog AR, Kahn RL, Morgan JN, et al. : Age Differences in Productive Activities. *Journals of Gerontology, Social Science* , 44(4) : S129 - S138 (1989).

7) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀ほか : 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム ; “REPRINTS” の 1 年間の歩みと短期的効果. *日本公衆衛生雑誌*, 53 : 702-714 (2006).

8) 島貫秀樹, 本田春彦, 伊藤常久ほか : 地域在宅高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康および QOL との関係. *日本公衆衛生誌* , 54 : 49-759 (2004).

9) 芳賀博 : 高齢者の役割の創造による社会活動の推進及び QOL 向上に関する総合的研究平成 16-17 年度総合研究報告書 (厚生労働科学研究研究費補助金長寿科学総合研究事業). (2006).

10) 古谷野巨, 柴田博, 中里克治ほか : 地域における活動能力の測定 : 老研式活動能力指標の測定. *日本公衆衛生雑誌* , 34, 109-114 (1987).

11) 近藤勉, 鎌田次郎 : 高齢者向け生きがい感スケール (K-I) の作成および生きがい感の定義. *社会福祉学*, 43 : 93-101 (2003).

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

- 1) 堀籠はるえ, 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 芳賀博他 : 郊外地域における住民のグループワークによる高齢者の役割の見直し (第 1 報) 地域住民が高齢者に期待している役割, 第 23 回日本保健福祉学会学術集会, 2010 年 10 月, 東京
- 2) 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 芳賀博他 : 郊外地域における住民のグループワークによる高齢者の役割の見直し (第 2 報) 役割の見直しと実践に向けた具体策の検討, 第 23 回日本保健福祉学会学術集会, 2010 年 10 月, 東京

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 美由紀 (SATO MIYUKI)

北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号 : 80550318